踏まれても踏まれても生き返る

いたばし雑草通信（ざっそう つうしん）

NO.14　2024.10.3

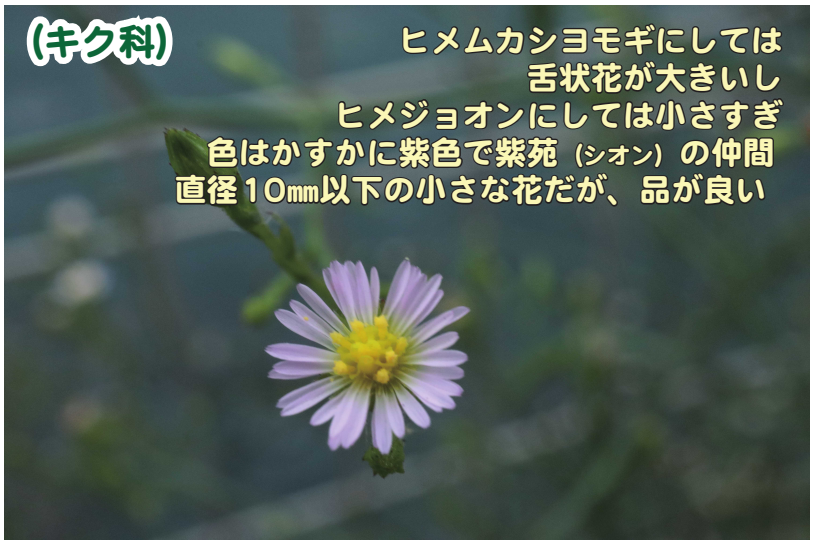
編集：発行　木村松夫
090-8646-9757
matsuokimura@gmail.com

メール発信のみの情報紙です。無料購読希望の方はメールでお申込みください。鮮明画像の PDF でお送りします。

ヒロハホウキギク

1960年代に北米から渡ってきた外来植物。No12で紹介したアレチハナガサは南米産で、1957年に日本での生育が確認されています。この２種が、この２、３年、我が家近くの道端で見られるようになってきました。

外来植物も50年以上も生きていると帰化植物となりこの地に定着し、あちこちに現れるのか？　それとも気候の変化がこれまで目立たなかった植物の生育を旺盛にしているのでしょうか？



人生修めの「修活活動」第二段階へ

この『雑草通信』、４月にテスト版を３号発行してから、本チャン版を８月まで立て続けに13号発行してきたのですが、それ以降９月には発行ゼロでした。この猛暑下で、近所の散歩にも出歩く気がしなかったこともあるのですが、主な時間はこれまでの活動のまとめに没頭していました。

生物多様性保全事業計画期間終了後の対策について書き遺す作業

ひとつは、10年ほど前から始まった東京都による都立赤塚公園の生物多様性保護・保全事業に関することでした。わたしはその準備段階から関わってきたのですが、事業期間が本年度を含めて３年間を残すのみとなりました。現役の活動を引退したとはいえ、この間の成果と課題についてはあとに続く人たちに伝えておかなければならないと考えて「生物多様性保全事業計画期間終了後の対策について」という文書作りに没頭していました。A4でたった６ページの文書を書き上げるのに推敲に推敲を重ねて１か月もかかりました。

わたしがニリンソウ自生地の保護活動の運営を引き継いだ時には名簿以外に引継ぎ文書らしきものは一切なし。仕方がないので、古い活動記録を引っ張り出してきて活動実績を掘り起こしマニュアルにしてきましたが、あの時の大海に身ひとつで投げ出された不安な思いは後を引き継いでくれる人たちに残してはいけないと思って書いていました。

まだしばらくは生きていようと思うので、これは「終活」ではなく、これまでの活動を修める「修活」と言うべきものです

エコポリの一斉調査事業の記録集計者づくりで、自分も修行

もう一つ。かかわってきた板橋区立エコポリスセンターの区内植物の一斉調査事業では、調査データをエクセルのファイルにして後の世代に残すために、そのデータ処理作業の担い手づくりに着手してきました。自分もエクセルの勉強をしながらの「修行」の「修活」活動です。

社会活動からの引退は会社の定年退職とは違います。辞めた以上、口を挟むことは出来ないけれど「もう引退したので、あとは知りません」というわけにもいきません。遺した資料は無視されて放置されることが大半で、しかも前任者のマイナス部分だけが強調されるのが常です。それでも「退（ひ）いていく者の役目」は果たしていきたいと思うものです。

江戸時代の用水路　その遺構が誰にも気を留められずに残っている　その記憶の記録　これも修活活動・・・

①の写真は板橋区と北区の境の姥が橋交差点を背にして北区側から板橋区方向側を眺めたところ。画面奥を横切っている道路から手前の、草が生え放題の低地は北区側になります。ちょいと見ただけでも幅５ｍはある結構広い草地なのですが、北区は何にも手を付けずに、数十年放置されたままです。

これは何なのか？

①の写真の奥を横切る道路の向こう側は南西に向かって下り坂になり、現在の帝京高校のグランドに突き当ります。そこから北側に振り返り、姥が橋方向を見た光景が②の写真です。

③は今から66年前の1958年にほぼ同じ位置で同じ方角を向いて撮った、信じられないけれど同じ場所です。

なんと、ここは谷間だった！

谷を流れる小川は江戸時代につくられた用水路です。板橋区の区史では「中用水」、『新編武蔵風土記』では「根付用水」と記されていて、練馬の三宝寺池から石神井川北側の高台の田畑を潤し、さらに北区側で王子・赤羽一帯に導かれた。とても大事な用水でした。

③の写真を撮った木村少年はまだ12歳でしたが、戦後発展期の当時はすでにどぶ川と化していました。①の写真はその下流の姥が橋の手前、水路は暗渠化されても、かすかに谷筋が認められます。昔は用水路や川などは誰の所有でもない公共の入会（いりあい）地でした。だから、用水の役割が終えても跡地は私有地に開放されることなく、かといって①のような場所では道路にも転用できないので、そのままになって今や貴重な歴史遺構となりました。

中用水＝根付用水は現在はすべて暗渠となっていますが、板橋区大和町の日曜寺と智清寺の門前には用水路にかかった石橋が残っています。道路になった暗渠を伝っていくと、本町から稲荷台へ②の写真の場所までをたどることができ、さらに①の場所で当時の谷の姿を偲ぶことができます。

板橋区の東端の加賀を挟んで北区の滝野川から十条、西が丘にかけては明治時代以降は陸軍の施設や練兵場がありました。その戦争遺跡もかすかに残っているので、いずれ改めて紹介します。